

論 文

「雅歌」(旧約聖書)の「愛」

吉野 政治

同志社女子大学
表象文化学部・日本語日本文学科
特別任用教授The Meaning of “Ai” (love) in *The Song of Solomon*

Masaharu Yoshino

Department of Japanese Language and Literature, Faculty of Culture and Representation,
Doshisha Women's College of Liberal Arts,
Special Appointment Professor

はじめに

これはソロモンの雅歌なり。ねがはしきは彼その口の接吻をもて我にくちつけ
せんことなり。汝の愛は酒よりもまさりぬ。

文語訳旧約聖書(明治二十一年[1888]刊)の「雅歌」(*The Song of Solomon*)は、早く上田敏が「全く国文の修養をおこたれる十数年前に於てよくもかゝる雅致の文をなし、か」(「細心精緻の学風」『帝国文学』第二巻第八号、明治二十九年八月発行)と驚歎して以来、今日に至るで名訳という評価は変わることはない。例えば『婦人之友』(婦人之友社 昭和三十年[1955]三月号)には詩人高村光太郎の次のような文章が載っている(「聖書日本訳の文体「雅歌」—私の好きな詩歌—)。

「北風よ起れ、南風よ来れ、我園を吹きてその香りを揚げよ。ねがはくはわが愛する者のおのが園に入りきたりてその佳き果を食はんことを。」

これは聖書「雅歌」第四章の終末の句である。何もこの句ばかりではなく、雅歌全体がゆたかない詩で、わたしはよく繰り返し読む。どういふ人が訳したのか、その日本語も品位があり、格調正しく、随分積極的な、激烈な、愛の感情をうたつていふのだが、騒がしくなく、しかもどうとうとしていふ。

また、辛口の評価をする藤原藤男氏も「措辞、文体、語感のニュアンスの深い美しさにおいて非常に優れ、口語訳などの遠くおよぶところではない」という誉めようである(『聖書の和訳と文体論』キリスト新聞社、昭和四十九年[1974]刊、「第8章五節「雅歌の翻訳文体管見」p.288)。

「雅歌」は、栄華を誇るソロモンと貧しい田舎の少女との愛を歌ったものとも、少女がソロモンの愛を退けて田舎の牧者の青年との愛を守ったものとも理解されている男女の愛を謳歌したものであるが、高村光太郎が言うように「随分積極的な、激烈な、愛の感情」がうたわれており、互いの肉体の美しさを称える句が繰り返され、肉体的関係を示唆する句もある。先に引用した冒頭の一節の「酒よりもまさる「接吻」も、キリスト教が認める神への敬虔を表わすものでも、支配者への服従を表わすものでも、親子兄弟や友人に対する愛情を表わすものでもなく、「その唇は百合花のごとくにして没薬の汁をした、ら」せ(第五章十三節)、「舌の底に蜜と乳」(第四章十一節)を求める性愛の接吻である。

したがって、そのような内容の書が聖書の正典となつている理由が問われてきた。かつては神の愛(アガペー *agape*)の寓喩として作られたものであると考えられていた。ユダヤ教においては、男は神であり、女はイスラエルの民である(注①)。キリスト教においては、男はキリストであり、女は教会である。しかし、イスラエ

ルにおける豊穡祈禱の祭儀、あるいはシリアにおける婚礼の儀式などで歌われていた民間歌が素材となっているのであるという研究が出されてからは(注②)、そうした男女の愛もまた、神の愛に導くものであるとする捉え方に落ち着いてきているようである(注③)。

こうした議論の根底には霊を尊び肉を卑しむ考え方、特にプロテスタントに特徴的な考え方がある。佐藤全弘氏の説明を借れば(『聖書は性についてどう教えるか「雅歌」に学ぶ』教文館、平成十八年〔2006〕刊。p.155)。

大陸では、カトリックもルター派それほどはなかったようですが、幕末から明治の初め、日本に影響を与えた西洋キリスト教には、霊肉分断、霊のみ尊重、肉は軽視という、福音本来の真理に背く考えが深くしみついていました。二千年近いギリシヤ哲学の伝統下に神学も教理もとのえ、ローマの法体制の影響下に教会法を組織してきた西洋キリスト教としては、無理もないことではありましたが、(下略)。

ということになる。したがって、「雅歌」そのものを無視するのではなければ、男女の愛を神の愛と結びつけて説明する必要があるわけである(注④)。

このキリスト教における霊尊肉卑の考えは愛の訳語の問題にも関わってくる。『聖書事典』(日本基督教団出版局、昭和三十六年〔1961〕刊)に言う、

愛は、聖書において、最も重要なことの一つであるから、聖書は、これを厳密に規定した。新約聖書はキリスト教の愛をあらわすために、ギリシヤ語で、普通に用いられる、四つの愛を表わす語、エロース(性的な愛)、ストルケ(家族に対する愛)、フィリア(友人に対する愛)、アガペーのうち、アガペーを用いている。旧約聖書のギリシヤ語訳においても、ヘブル語の愛にあたるアハバーの訳語には、アガペーのみが用いられている。これは、いずれも愛を他の類似の愛と区別するためである。(アガペーの―引用者注) 愛は、神の人間に対する愛、人間の神に対する愛、人間の人間に対する愛の、三つに分けて考えることができる。

アガペーのうち、「人間の人間に対する愛」は『聖書大辞典』(日曜世界社、昭和九年〔1934〕刊)では「神との契約における―宗教によって浸潤された―人間相互の愛である」と説明されている。

ところで、江戸時代以前の日本において「愛」という語は自己本位の愛(エロース)を意味するものであった。文禄慶長の時代(1590―1611)のギリシヤン文献では、アガペーの愛は「御大切」と訳さざるをえなかったことは知られている(注⑤)。ところが、明治期に訳された聖書ではアガペーの愛をも「愛」と訳されてい

る。それは如何にして可能になったのであろうか。また、その時エロースの愛を意味する「愛」との関係はどのようなようになっていたのだろうか。本稿では、こうした問題を文語訳旧約聖書「雅歌」の訳語を通して考えてみたい。

アハヴァーの「愛」とドデーの「愛」

文語訳「雅歌」に現れる「愛」「愛す」という訳語は、ヘブライ語原文にアハヴァー(ahavar)とあるものに対してだけでなく、ドデー(dodi)とあるものに対しても用いられている(注⑥)。それらを表にすると次のようになる(注⑦)。

表には、『旧約全書』(明治二十一年〔1888〕刊)の日本語訳(本稿では【元訳】と呼ぶ)にその日本語訳を行うのに用いられた欽定英訳【A V】と三種の漢訳―ブリッジマン・カルバートソンの漢訳【B C】、英国と米国の代表者による漢訳【代表】、北京官話訳【官話】―の訳語をも併せて示すことにする。用例の所在は第一章三節を(1・3)などと示す。ヘブライ語原文と【元訳】とで節番号が異なるものは【元訳】による。

アハヴァー

(章・節)	【元訳】	【A V】	【B C】	【代表】	【官話】
(1・3)	愛す	love	愛	愛	愛慕
(1・4)	愛す	love	愛	愛	愛慕
(1・7)	わが(心の)	愛する者	my soul loveth	我心所愛者	我心所愛的
(2・4)	愛	love	愛	恩寵	寵愛
(2・5)	愛	love	愛	愛	思愛
(2・7)	愛	my love	我所愛者	我良人所眷愛	我所親愛的
(3・1)	わが(心の)	愛する者	my soul loveth	我心所愛者	我心所愛的
(3・2)	わが(心の)	愛する者	my soul loveth	我心所愛者	我心所愛的
(3・3)	わが(心の)	愛する者	my soul loveth	我心所愛者	我心所愛的
(3・4)	わが(心の)	愛する者	my soul loveth	我心所愛者	我心所愛的

(3・5)	愛 <small>あい</small>	my love	我所愛者	夫子	我所親愛的			
(3・10)	愛 <small>あい</small>	love	愛	(なし)	愛			
(5・8)	愛 <small>あい</small>	love	愛	眷愛之情	思愛			
(7・6)	愛 <small>あい</small>	love	我所愛者	愛妃	我所愛的			
(8・4)	愛 <small>あい</small>	my love	我所愛者	我所愛之夫子	我所親愛的			
(8・6)	愛 <small>あい</small>	love	寵愛	我愛	愛情			
(8・7)	愛 <small>あい</small>	love	愛寵	我眷愛之情	愛情			
(8・7)	愛 <small>あい</small>	love	愛	博愛	愛情			
ドディー								
(章・節)	【元訳】	【A V】	【B C】	【代表】	【官話】			
(1・2)	汝の愛 <small>あい</small>	thy love	爾之愛	爾眷愛之情	你的愛情			
(1・4)	なんぢの愛 <small>あい</small>	thy love	爾之愛	爾眷愛之情	你的愛情			
(1・13)	わが愛する者 <small>もの</small>	my wellbeloved	我所愛者	我所敬愛	我的良人			
(1・14)	わが愛する者 <small>もの</small>	my beloved	我所愛者	我所敬愛	我的良人			
(1・16)	わが愛する者 <small>もの</small>	my beloved	我所愛者	我所敬愛	我的良人			
(2・3)	わが愛する者 <small>もの</small>	my beloved	我所愛者	我所眷愛	我的良人			
(2・8)	わが愛する者 <small>もの</small>	my beloved	我所愛者	夫子	我的良人			
(2・9)	わが愛する者 <small>もの</small>	my beloved	我所愛者	彼	我的良人			
(2・10)	わが愛する者 <small>もの</small>	my beloved	我所愛者	(なし)	我良人			
(2・16)	わが愛する者 <small>もの</small>	my beloved	我所愛者	夫子	良人			
(2・17)	わが愛する者 <small>もの</small>	my beloved	我所愛者	夫子	我的良人			
(4・10)	なんぢの愛 <small>あい</small>	my beloved	我所愛者	夫子	我的良人			
(5・2)	わが愛する者 <small>もの</small>	my beloved	我所愛者	夫子	我所愛者			
(5・4)	わが愛する者 <small>もの</small>	my beloved	我所愛者	夫子	我所愛者			
(5・5)	わが愛する者 <small>もの</small>	my beloved	我所愛者	我之夫子	我的良人			
(5・6)	わが愛する者 <small>もの</small>	my beloved	我所愛者	(なし)	我良人			
(5・8)	わが愛する者 <small>もの</small>	my beloved	我所愛者	夫子	我的良人			
(5・9)	なんぢのわが愛する者 <small>もの</small>	thy beloved	爾之所愛者	爾之夫子	你的良人			
(5・10)	わが愛する者 <small>もの</small>	another beloved	他愛者	他人之夫子	別人的良人			
(5・16)	わが愛する者 <small>もの</small>	my beloved	我所愛者	我之夫子	我的良人			
(6・1)	汝のわが愛する者 <small>もの</small>	my beloved	我之所愛者	我之夫子	我的良人			
(6・2)	わが愛する者 <small>もの</small>	thy beloved	爾之所愛者	爾之夫子	你的良人			
(6・2)	わが愛する者 <small>もの</small>	my beloved	我所愛者	我之夫子	我的良人			
(4・16)	わが愛する者 <small>もの</small>	thy love	爾之愛寵	(なし)	你的愛情			
(5・1)	わが愛する者 <small>もの</small>	my beloved	我所愛者	我夫子	我的良人			
(5・2)	わが愛する者 <small>もの</small>	beloved	我所愛之諸侶	爾曹友朋	我所親愛			
(5・4)	わが愛する者 <small>もの</small>	my beloved	我所愛者	夫子	我良人			
(5・5)	わが愛する者 <small>もの</small>	my beloved	我所愛者	我之夫子	我的良人			
(5・6)	わが愛する者 <small>もの</small>	my beloved	我所愛者	(なし)	我良人			
(5・8)	わが愛する者 <small>もの</small>	my beloved	我所愛者	夫子	我的良人			
(5・9)	なんぢのわが愛する者 <small>もの</small>	thy beloved	爾之所愛者	爾之夫子	你的良人			
(5・10)	わが愛する者 <small>もの</small>	another beloved	他愛者	他人之夫子	別人的良人			
(5・16)	わが愛する者 <small>もの</small>	my beloved	我所愛者	我之夫子	我的良人			
(6・1)	汝のわが愛する者 <small>もの</small>	my beloved	我之所愛者	我之夫子	我的良人			
(6・2)	わが愛する者 <small>もの</small>	thy beloved	爾之所愛者	爾之夫子	你的良人			
(6・2)	わが愛する者 <small>もの</small>	my beloved	我所愛者	我之夫子	我的良人			

(6・3) わが愛する者 my beloved 我之所愛者 夫子 我的良人

わが愛する者 my beloved (なし) 夫子 我的良人

(7・9) わが愛する者 my beloved 我至愛之友 寢者 我的良人

(7・10) わが愛する者 my beloved 我之所愛者 夫子 我的良人

(7・11) わが愛する者 my beloved 我所愛者 (なし) 我的良人

(7・12) わが愛 my loves 愛 閨房之福 我的愛情

(7・13) わが愛する者 my beloved 我所愛者 我夫子 我的良人

(8・5) おのれのわが愛する者 her beloved 其所愛者 其夫 良人

(8・14) わが愛する者 my beloved 我之所愛者 夫子 我的良人

ヘブライ語原文にドディーとあるものに対する日本語訳の多くは「わが愛する者」であるが、肉体の美しさが官能的肉感的に説明された文脈で用いられているものが多い。

○君の女よ、なんぢの足は鞋の中にありて如何に美はしきかな、汝の腿はまろらかにして玉のごとく、巧匠の手にて作りたるがごとし。なんぢの臍は美酒の欠ることあらざる円き杯盤のごとく、なんぢの腹は積かさねたる麦のまほりを百合花もてかこめたるが如し。なんぢの両乳房は牝鹿の双子なる二の小鹿のごとし。なんぢの頸は象牙の戊楼の如く、汝の目はヘシボンにてパテラビムの門のほとりにある池のごとく、なんぢの鼻はダマスコに対へるレバノンの戊楼のごとし。なんぢの頭はカルメルのごとく、なんぢの頭の髪は紫色のごとし。

(中略) なんぢの身の長は棕櫚の樹に等しく、なんぢの乳房は葡萄のあざのごとし。われ謂ふ、この棕櫚の樹にのぼり、その枝に執つかんと。なんぢの鼻の氣息は林檎のごとく匂はん、なんぢの口は美酒のごとし、わが愛する者のためには滑らかに流れくだり、睡れる者の口をして動かしむ。われはわが愛する者につき、彼はわれを恋ひしたふ。わが愛する者よ、われら田舎にくだり、村里に

宿らん。(7・11)

「汝の愛」「わが愛」という訳語もまた、抱擁とか愛撫などを意味するものである。

○ねがはしきは彼その口の接吻をもて我にくちつけせんことなり。汝の愛は酒よりもまさりぬ。(1・2 再掲)

○われを引たまへ。われら汝にしたがひて走らん。王われをたづさへてその後宮にいれたまへり。我らは汝によりて歎び樂しみ、酒よりも勝りてなんぢの愛をほめたふ。(1・4)

○わが妹わが新婦よ、なんぢの愛は樂しきかな。なんぢの愛は酒よりも遙かにすぐれ、なんぢの香膏の馨は一切の香物よりもすぐれたり。(4・10)

○わが愛する者よ、われら田舎にくだり、村里に宿らん。われら夙におきて、葡萄や芽し、蒼やいでし、石榴の花やささし、いざ葡萄園にゆきて見ん、かしこにて我わが愛をなんぢにあたへん。恋茄かぐはしき香気を発ち、もろくの佳き果物古き新しき共にわが戸の上へあり。わが愛する者よ、我これをなんぢのためにたくはへたり。(7・11-13)

最後の例は【代表】では「閨房之福」と訳されている。また、「恋なす(恋茄)(mandrake)は愛の妙薬である(創世記)30・14-16)。

したがって、原文のドディーに当たる箇所に見れる日本語訳の「愛」はエロス(肉の愛)であると言ふことができようである。

これに対して、ヘブライ語原文にアハヴァーとあるものに対応する日本語訳の多くは「愛」「愛す」であるが、「わが心のわが愛する者」という形で現われるものも五例ある。原文では「シエアハヴァー(愛しているところ) ナフシー(私の魂が)」とあり、「心の」はナフシーに対応するものである。【AV】ではmy soul loveth、【BC】では「我心所愛者」に対応する。したがって、アハヴァーに「心の」という意義は含まれてはいないようであるが、こうした表現がなされていることによつて、アハヴァーが精神的な愛に用いられるものであることは理解できる。【元訳】でも「わが心のわが愛する者」は次のように用いられている。

○わが心のわが愛する者よ、なんぢは何処にてなんぢの群を牧なひ、午時いづこにて之を息ますや。請ふ、われに告よ、なんぞ面を覆へる者の如くしてなんぢが伴侶の群のかたはらにをるべけんや。(1・7)

○夜われ床にありて、我心のわが愛する者をたづねしが、尋ねたれども得ず。我おもへらく今おきて邑をまほりありき、わが心のわが愛する者を街衢あるひは大路にたづねんと。乃ちこれを探ねたれども得ざりき。邑をまほりありく夜巡者らわれに遇ければ、汝らわが心のわが愛する者を見しやと問ひ、これに

別れて過ゆき、間もなくわが心のわが愛する者に遇ひたれば、之をひきとめて放さず、遂にわが母の家にともなひゆき、我を産し者の室にいりぬ。

(3・1~4)

しかし、アハヴァーに対応する「愛」「愛す」にも次のようにエロスの愛を意味していると思われるものがある。

○なんぢの香膏は其香味たへに馨しく、なんぢの名はそ、がれたる香膏のごとし。是をもて女子等なんぢを愛す。

(1・3)

○彼われをたづさへて酒宴の室にいられたまへり。その我上にひるがへしたる旗は愛なりき。

(2・4)

○請ふ、なんぢら乾葡萄をもてわが力をおぎなへ、林檎をもて我に力をつけよ。我は愛によりて疾わづらふ。

(2・5)

○エルサレムの女子等よ、我なんぢらにかたく請ふ、もしわが愛する者にあはざら何とこれにつぐべきや、我愛によりて疾わづらふと告よ。

(5・8)

○其は愛は強くして死のごとく、嫉妬は堅くして陰府にひとし。その焰は火のほのほのごとし。いともはげしき焰なり。

(8・6)

右の三例目と四例目は新共同訳では「恋」と訳されている。最後の例は「嫉妬」と裏腹の関係にある「愛」である。

さらに、先にドデイーに対する訳の「わが愛する者」の中に、身体の各部位の美しさを並べ上げている例(七章1~11節)を挙げて、ドデイーの「愛」は官能的肉感的であるとしたが、その引用で中略した部分(6節)は次のようなものであり、そこに現われる「愛」はドデイーではなく、アハヴァーに対応するものである。

○あ、愛よ、もろくの快樂の中においてなんぢは如何に美はしく如何に悦ばしき者なるかな。

(7・6)

次の例も同様である。傍線を引いた「愛」「愛す」はアハヴァーに対する訳であるが、ゴチックで示した「愛」はドデイーに対する訳である。

○ねがはしきは彼その口の接吻をもて我にくちつけせんことなり。汝の愛は酒よりもまさりぬ。なんぢの香膏は其香味たへに馨しく、なんぢの名はそ、がれたる香膏のごとし。是をもて女子等なんぢを愛す。われを引たまへ、われら汝にしたがひて走らん、王われをたづさへて、その後宮にいられたまへり。我らは汝によりて歡び樂しみ酒よりも勝りてなんぢの愛をほめた、ふ。彼らは直きこゝろをもて汝を愛す。

(1・2~4)

以上のようにアハヴァーに対応する「愛」「愛す」は、アガペーの愛だけではなく、エロスの愛も意味しているようであるが、それはヘブライ語のアハヴァーがそ

のような意味を持つものであることによるようである。

先に『聖書事典』(日本基督教団出版局)に「旧約聖書のギリシャ語訳において、ヘブル語の愛にあたるアハバの訳語には、アガペーのみが用いられている」と説明されていたが、G・ロイド・カー著、島先克臣訳『雅歌』(ティンデル聖書注解)いのちのことは社、2006年刊、p.65)にも、

七十人訳の *Septuaginta* アガペーの語群がヘブル語の *ahab* の語群の訳として一般的に使われていることは、注目に値する重要なことである。*ahab* アハブという動詞とそこから派生した名詞と形容詞は、古典ギリシャ語を使う者が区別した *philia* フィリア、*storge* ストルゲーそして *eros* エロスの間の様々な違いを含んでしまっている。

とある。これをヘブライ語の側から言えば、ヘブライ語のアハヴァーはエロスの愛をも含むということである。

旧約聖書研究者の松田伊作氏は、アハヴァー (*ahab*) の意義素を「相手を望ましいものと認め、これを精神的にも肉体的にも結合することを強く欲する」ことであるととし、そのように定義するのは「*ahab* が本来人間関係でとくに男女間の場面に現れる動詞で、神と人との場面に出るのは類推に基づく二次的用法である可能性が大きいからである」と言われ、「*ahab* は本来激しい性的意欲であって、日本語の「恋する」に見られるような漠たる憧憬の情ではない」とされる(注⑧)。関根正雄氏もこれを肯定し、

旧約では人の内心の動きとその結果の行動とを分けて考えない、という特徴がある。それゆえ *ahab* は心で「欲しがる」だけでなく「奪いとる」という行動を含む。(中略) *ahab* は「想い出す」というだけでなく、例えば神を守護とする場合その救いの行為を含む(創世記八1、一九29等)。「愛する」も行為を含むから男女間の場合には、性関係を含意する場合が多い(創世記二四67)と言われている(注⑨)。

日本語訳旧約聖書はギリシャ語訳からではなく、ヘブライ語原文から訳されたという。旧約聖書翻訳完成祝賀会での講演において、翻訳委員の長であったヘボンができる限りヘブライ語原文に忠実に訳したと述べている。したがって、アハヴァーに対応する「愛」「愛す」という訳語がアガペーの愛だけではなく、エロスの愛をも意味するのは誤りではないのである(注⑩)。

2 「元訳」の試み

古代ギリシャ文明とともに現代の欧米文明の二大思潮をなしているヘブライ文明の宗教的思想からイスラム教とユダヤ教が生まれ、さらにキリスト教が生まれたが、池田裕史氏は「ヘブライ人の世界は、後のユダヤ教の世界よりも広いし、『旧約聖書』の人間関係―特にアハヴァーの問題に対する見方は、その後、他宗教、他文化から自分たちを守らなければならないという強い自己防衛意識の下で育ち発展したユダヤ教の教えと比べて、より自由であり、よりおおらかである」(注⑩)と言われている。「旧約聖書」はヘブライ文学の最大のものであり、「雅歌」はそうしたヘブライ人の世界で歌われていたものであった。「雅歌」のそうした本質を「元訳」の翻訳者たちは理解していたのではないかと思われる。しかしなお、プロテスタントの宣教師として、キリスト教の教義にしたがって、男女の愛もまた、神の愛に導くものであるとし、そのように理解させる仕掛けを、日本語訳の中で行なっているようである。例えば、「彼らは直き(1)を、ろをもて汝を愛す」(1・4)とある「直き(1)を、ろをもて」は、英訳の upright (道徳的にまっすぐな。高潔な)、漢訳の「誠実」によるものと思われるが、原文はメシヤリズム(まっすぐに)であり、共同新訳の「ひたすら」という訳が正しいものと思われる。

また、次のような他の部分とは異なる訳し方が見られる箇所もそうであろう。というのは1節に掲げた表からも分かるように、「元訳」の愛に関する訳語は、ほぼ漢訳【BC】の訓読が利用されているが、次のような例外がある。

○あ、愛よ、もろく(の)の快楽の中にありてなんちは如何に美はしく如何に悦ばしき者なるかな。(7・6)

我所愛者歟。爾何其美哉。何其可悦哉。因所使^レ之快楽^一也。(BC)

この訳は漢訳からではなく、原文あるいは英訳から訳されたものようである。ヘブライ語の原文と英訳は次のとおりである(原文の発音は原則的にカタカナで表記されるが、特定の子音はひらかなで表記される)。

○マー(何と) ヤファイート(あなたは美しい) ウマー(そして何と) ナアムト(あなたは心地よい) アハヴァー(愛よ) バタアヌギム(快樂の中の)

How fair and how pleasant art thou, O love, for delights! (7・6)

また、【BC】では「寵愛」とあり、イツクシミなどと訳される(注⑫)のが普通であろうと思われるものが「愛」と訳されている次の例も同様に考えられる。

○其は愛は強くして死のごとく、嫉妬は堅くして陰府にひとし。その焰は火のほのほのごとし。いともはげしき焰なり。(8・6)

蓋寵愛堅如^レ死然。熱心之愛、固如^レ陰府^一然。其炎甚疾、如^レ烈烈之電閃^一。(BC)

○愛は大水も消ことあたはず。洪水も溺らすことあたはず、人その家の一切の物をことごとく与へて愛に換んとするとも尚いやしめらるべし。(8・7)

多水不能滅^レ愛寵、洪水不能^レ覆^レ溺^一、人雖^レ欲^レ以^レ其家之全業、為^レ此愛^一而付^レ之、必尽見^レ藐忽^一矣。(BC)

これらの原文また英訳は次のとおりである。

○スイマーニ(あなたは私を置き)はほタム(印章のように)アる(の上に)りベーは(あなたの心)カほタム(印章のように)アる(の上に)ゼロエーは(あなたの腕)キー(なぜなら)から)アザー(力強い)はマヴェット(死のように)アハヴァー(愛は)カッシャー(過酷な)ひシユオー(陰府のように)キヌアー(熱情は)レシヤフェーハ(その炎は)リシユペー(炎)エッシユ(火の)シヤるヘヴェットウヤー(主の火炎)

Set me as a seal upon thine heart, as a seal upon thine arm for love is strong as death: jealousy is cruel as the grave: the coals thereof are coals of fire, which hath a most vehement fame. (8・6)

○マイム(水は)ラビーム(多くの)ろーユヘー(できない)れはポット(消すことが)エット(を)ハアハヴァー(愛)ウンハロット(大河も)ロー(それを)イシユテフフーハ(押し流さない)イム(もし)ならば)イテン(与える)イーシユ(人が)エット(を)コ(全て)ホン(財産の)ベトー(彼の家の)バアハヴァー(愛に換えて)ボズ(彼らは)ヤヴズー(ひどく軽蔑する)ろー(彼を)

Many waters cannot quench love, neither can the floods drown it: if a man would give all the substance of his house for love, it would utterly be contemned. (8・7)

以上三例の「愛」もまた男女の性愛について言ったものと理解するのが自然であろうが、文脈から切り離れた時には、神の愛の崇高さや力強さを説明するものと理解できないことはないものである。

さらに次の例も漢訳【BC】の「我所愛者」の訓読は利用されず、「愛」とだけ訳されているものである。

エルサレムの女子等よ。我なんぢらに罽と野の鹿とをさし誓ひて請ふ。愛のおのづから起るときまでは殊更に喚起し且つ醒すなかれ。(2・7)

耶路撒冷之諸女歟。我指^レ罽及田之鹿^一而嘱^レ爾曹、毋^レ擾^レ母^レ醒^レ我所^レ愛者^一

一、待^レ其適^レ願焉。

(B C)

この文は第三章五節と第八章四節でも繰り返されるものである。【B C】ではほぼ同じ文で繰り返されているが、漢訳【代表】では次のように訳が変わっている。

維彼麀鹿於田間、我指^レ之而誓、耶路撒冷女乎。維我良人我所^レ眷愛^一、酣寢之時、爾勿^レ驚^レ之、待^レ其自寤^一。

(2・7)

維彼麀鹿於田間、我指^レ之而誓、耶路撒冷女乎。夫子酣寢之時、爾勿^レ驚^レ之、待^レ其自寤^一。

(3・5)

耶路撒冷女乎。我所^レ愛夫子酣寢、爾勿^レ驚^レ之、待^レ其自寤^一。

(8・4)

これらが「愛」と訳されたのも、ヘブライ語原文また英訳によるものと考えられる。原文と英訳の関係部分のみを次に示す(ともに3箇所とも同文である)。

イム(あなた達は) タイール(決して起こすな) ヴエイム(そしてあなた達は) テオレルー(決して覚ますな) エット(を) ハアハヴァー(愛を) アッド(まで) シエテふバツ(それが望む)(原文)

ye stir not up, nor awake my love, until he please. (A V)

この例は、わが愛する者が自然と目覚めるまでその睡りを邪魔をしないで欲しいと願っているところであり、【B C】の「我所^レ愛者」を訓読して「わが愛する者」と訳するのが自然なところである。にもかかわらず、【元訳】がこれを、敢えて「愛」と訳しているのは、特別な理由があったものと思われる。節を改めて、それについて述べたい。

3 「愛のおのづから起るときまでは」

右までに検討してきた「雅歌」の日本語訳は、明治二十一年に刊行された『旧約全書』所載のものであるが、それ以前に明治十九年にヘボンとフルベッキと松山高吉との共訳とされる『雅歌』が刊行されている。この初訳本は後述のような理由で見ることができないが、そのわずか一年後にヘボンの『箴言雅歌』とヘボンとフルベッキと井深梶之助の共訳によるとされる『雅歌耶利米哀歌』が出されている。前者のヘボン訳『箴言雅歌』もまた本稿の筆者は見ることができないが、後者は明治二十一年刊『旧訳全書』に載せられているものと同一訳である(立教大学海老沢有道文庫、デジタルライブラリーによる(注⑬))。

明治十九年刊の分冊の訳が明治二十年刊のものと同じ訳であれば、明治二十年版は刊行されなかったはずである。おそらくは明治十九年版は部分的ではあっても改訳されたのであろう。

しかし、そのことを確かめることはできない。その改訳が明治十九年の分冊の刊行以後のことであれば、明治十九年刊の分冊の訳を確認すればよいことになるが、上田文庫聖書館に唯一所蔵されていたその分冊(上田貞治郎編『基督教古書目録』上田文庫聖書館、昭和十五年[1940]刊)は、大阪空襲によって消失したようである。しかし、明治二十一年刊『旧訳全書』に載せられている訳には、以下述べるように改訳が行われたことを窺わせるものがある。

問題とする句は前述のように「雅歌」で三度繰り返されるが、正確には全く同じではない。先の引用(2・7)では「起る」とあるものが、他の二箇所(3・5、8・4)では「起る」となっている。ほぼ同じ時に刊行された『言海』(明治十七年[1885]序)によれば、オコル(起・興(四段活用))は「(一) 始マル。出デ来。(二) 新二建ツ。(三) 病ミ初ム」の意味であり、「起る」すなわちオク(起(上二段活用))は「(一) 倒レタルヨリ立ツ。オコル。(二) 眠リタルヨリ覚ム。寢所ヨリ出ツ」の意味である。オクにオコルの意味を挙げているのは、オキルの項に「起クノ訛」(『大言海』では「起クノ口語」とあることと関係するものと思われるが、文語文で訳されている【元訳】がここにだけ口語を用いたとは考えられない。【元訳】の旧約全体を見てもそのような例は見あたらないようである。少なくとも「雅歌」にはオク(起)の用例が他にも、

我おもへらく今おきて邑をまはりありき、わが心の愛する者を街衢あるひは大路にてたづねんと (3・2)

やがて起いで、わが愛する者の為に開かんとせしとき (5・5)

わが愛する者よ。われら田舎にくんだり、村里に宿らん。われら夙におきて葡萄や芽やいでし(中略) ゆきて見ん。 (7・11・12)

と見られるが、「眠リタルヨリ覚ム。寢所ヨリ出ツ」の意であり、オコル(起・興)の意味ではない。また、明治二十年の「雅歌」の訳に関わったヘボン・フルベッキは「箴言」(同じく明治二十年刊)の訳にも関わっているが、その書でもオコル(起・興)とオク(起)は「いづれの時まで睡りて起ざるや」(6)、(6)、「彼を殺すころを起すなかれ」(19:18)などと正しく用いられている。また、明治十九年の「雅歌」を訳に関わった松山高吉は「詩篇」の訳にも関わっているが、その「詩篇」でも、

我にあたする者のいかに蔓延れるや、われにさからひて起りたつもの多し。 (3・1)

われ黙して唾となり善言すらことばにいたさず、わが憂なほおこれり(39・2) エホバよ、なんぢ怒をもて起、わが仇のいきどほりにむかひて立ちたまへ

かつ云ふ、かれに一のわざはひつきまとひたれば仕れふしてふた、び起ること
 (7・6)
 不からんと。
 (41・8)

のように正しく用いられている。

ただし、訂正されるべきものが誤ってそのままになることは、まああったことである。例えば明治十年版分冊『約翰書』には

第四章の一二三節および六節なる靈の五字はれいと傍訓すべきを筆工みたま
 にあやまれり。検閲の際みおとし已に製本したりしにより、今ここにその誤を
 正す。故に右にいへる靈の五字みたまとあるはれいの誤と知るべし。

と書かれた正誤表が挿入されているが(海老沢有道著『日本の聖書—聖書訳の歴史—』日本基督教団出版部、昭和三十九年〔1964〕刊、第六章V「委員訳分冊聖書の正誤表」)、「起る」も同様に、「起る」と改めるべきものが訂正されなかった可能性もあろう。

しかし、正しく訂正されたとしても、それぞれの用例は「雅歌」の中では次のような文章の後に位置するのであり、話の流れとしては、「愛する人が自然に眠りから醒めるまで」無理に起こすことなかれ、という意味となる「起る」である方が自然であることは否めないものである。

○わが愛する者の男子の中にあるは林の樹の中に林檎のあるがごとし。我ふかく喜びてその蔭にすわれり。その実はわが口に甘かりき。彼われをたづさへて酒宴の室にいられたまへり。その我上にひるがへしたる旗は愛なりき。請ふ、なんぢら乾葡萄をもてわが力をおきなへ林檎をもて我に力をつけよ。我は愛によりて疾わづらふ。かれが左の手はわが頭の下にあり、その右の手をもて我を抱く。
 (2・3・3-6)

○これに別れて過ゆき、間もなくわが心のわが愛する者に遇ひたれば之をひきとめて放さず、遂にわが母の家にともなひゆき、我を産し者の室にいりぬ。
 (3・4)

○ねがはくは汝わが母の乳をのみしわが兄弟のごとくならんことを。われ戸外にてなんぢに遇ふとき接吻せん。然するとも誰にありてわれをいやしむるものあらじ。われ汝をひきてわが母の家にいたり汝より教誨をうけん。我かぐはしき酒石榴のあまき汁をなんぢに飲まましめん。かれが左の手はわが頭の下にあり、その右の手をもて我を抱く
 (8・1-3)

おそらくは当該箇所は当初こうした文脈に沿い、【AV】や漢訳を参考に、わが愛する者のおのづから起るときまでは殊更に喚起し且つ醒すなかれ。

と訳されていたものと思われる。それが、
 愛のおのづから起るときまでは殊更に喚起し且つ醒すなかれ。

と訳し直されたのではなからうか。こうした改訳が敢えて行なわれたのは、男女のエロスの愛もまた神のアガペーの愛へ転換させることができることを示そうとしたからではないかと推測するのである(注⑭)。

これに関連して注目したいのは旧約聖書の改訂英訳聖書(Revised Version. 【RV】)が明治十八年(1885)に出版されていることである。「雅歌」も欽定英訳【RV】と【AV】とでは部分的ではあるが違いがある。当該の「雅歌」の部分も、【RV】では、

That ye stir not up, nor awaken love,

Until it please.

(2・7)

となつてゐる。すなわち【AV】で my love とあつたものが love となつて(注⑮)、
 王で受けられ、awaken が awaken となつてゐる。awake は「眠っている人を起こす」の意味であり、awaken は「喚起する」「覚醒させる」「覚醒する」などの比喩的の意味で用いることが多い語である(注⑯)。つまり、「愛する人が自然に眠りから醒めるまで」といった意味であつたものが「愛の感情が自然に生じるまで」といった意味に変わつてゐる。【元訳】の翻訳者たちはこれに注目し、日本語訳もそれに従つて訳し直されたのではなからうか。

ちなみに、【RV】は「雅歌」の愛を神の愛として読みとらせようとすることに積極的である。それは【AV】が a most vehement flame. (もつとも激しい炎)と訳しているところを a very flame of the Lord (主の炎)と訳していることから窺える。

For love is strong as death:

愛は死のごとく強く

Jealousy is cruel as the grave:

嫉妬は墓穴のごとくむごい。

The flashes thereof are flashes of fire,

その閃きは火の閃きであり、

A very flame of the Lord.

主の炎である。

(8・6)

原文は「シヤるヘヴェットウヤ」であるが、この語は「激しい炎」という意味にも「主の炎」という意味にも理解できるようである(注⑰)。しかし、「雅歌」には他には神に関する語はあらわれないので、一般には「激しい炎」と訳されている。【元訳】もまた、この箇所については【RV】に従つて改めることはせず、「いとまはげしき焰なり」と訳している。それは「はじめに」で述べた「雅歌」そのものに対する理解と「雅歌」の訳に関わつた日本語訳委員(松山高吉と井深梶之助)の「愛」という語についての理解の仕方に関わるのではないかと思われる。そのこと

については節を改めて述べることにする。

4 新約聖書の「愛」と旧約聖書の「愛」

本稿で取り上げた「旧約聖書」の「愛」という訳語の問題は、アガペーの愛を当時の日本がどのように理解したのかという問題と関わるであろう。

宮地敦子氏(注⑩)は【元訳】がアガペーの愛を「愛」と訳し得た理由を次のように説明されている。

「あいす」と訳すことは、時・場所を同じくして、ギリシヤ原典の *agape*、漢訳の「愛」(もしくは「仁」)をつき合わせることににより、はじめて可能であったのではあるまいか。くりかえしていえば、(中略) *agape* もしくは *love* の中国語訳「愛」を日本語「あいす」でうけとめたからではなからうか。中国語というクッションがあればこそ、日本語「あいす」の変貌が可能であったのではなからうかと思う。

これに対して、大野透氏(注⑪)は、

明治前期では、漢語「愛」に應ずる非通俗的な「愛」「愛す(る)」が用ゐられてをり、その流れは現代まで続いてゐるが、対等の人間として相手を思ひ、遇する(男女間の愛に於ても)意に用ゐられる傾向が著しくなつてゐるのは、キリスト教の影響など西洋の影響が認められる。

としつつ、

聖書のいはゆる委員会訳(明治七〜一三)が「愛す」を用ゐるに至つたのは、(宮地敦子氏は一引用者注)漢訳聖書に強く影響されたものであるとするが、さ程影響されたものとは考へられない。

とし、中村正直の「敬天愛人説」(明治元年)の「何謂^レ愛^レ人。曰、敬^レ天、故愛^レ人。」また福沢諭吉の「文明論之概略」(明治八年)の「神を愛し人を愛するの外」という例を挙げて、これらはかつての日本語の「愛」(専ら行動、殊に肉体的表現に用いられたもの)が、既にその意味と対象とを拡大していたものと考えられている(注⑫)。

大野氏の説に従うべきものかどうかであるが、中村正直や福沢諭吉らは何によつて、そのような「愛」の用いられ方を学んだのであろうか。新村出博士によれば(注⑬)、中国において、ラテン語のアモール、英語のラヴなどを「愛」と訳したのは、ポルトガル出身の在華宣教師エンマヌエル・テイアスによる『コンテンツ・ムンヂ』の漢訳本『軽世金書』(明末・崇禎十三年[1640]刊)が早い例のようである

が、この書では慶長十五年[1610]刊の日本語訳では「デウスの御大切」とあるところが「愛主」と訳されている。すなわちアガペーの愛を「愛」と訳している例が十七世紀の中国で見られるのである。その後、十九世紀になると、ロバート・モリソンの『新遺詔書』(嘉慶十九年[1814]広東刊)に、

○乃我言^レ爾、聽、愛^レ爾之仇、恨^レ汝者、行^レ善与^レ之。(路加伝福音書、6・27)
○非^レ我愛^レ神、乃神愛^レ我等^一、及遣^レ厥子^一以^レ我等罪^一保^レ贖者也。列愛輩、倘神如^レ此愛^レ我等^一、我亦必^レ相愛^レ也。(若翰^一之第一公書、4・10〜11)

といった例がみられ、さらに英米各宣教会の宣教師の代表の作業による『新約全書』(一八五二年刊、すなわち【代表訳】)、ブリッヂマンとカルバートソンを中心とする米国籍委員による『新約全書』(一八五九年刊、すなわち【BC訳】)に見られる。このような「愛」が中国で成立したのは、宮地氏が言われるように、ギリシヤ原典の *agape* に儒教の仁の意味を持った「愛」を当てたことによるものであろうが、いずれにせよ、既に中国において「愛」はアガペーの愛をも表わすようになっており、それが日本にもたらされたのであろう。それは具体的には【代表訳】【BC訳】の『新約全書』によるのではないか。委員会による聖書の日本語訳はこれら漢訳聖書を利用して作られているが、「新約聖書」の日本語訳が作られる以前には、これらの漢訳聖書が日本でも読まれていたのである。

ところで、前述のように宮地氏はアガペーの愛を日本語の「愛」に取り込んだのは明治の翻訳委員会訳の「新約聖書」であったとするが(注⑭)、大野氏が「キリスト教の影響など西洋の影響」と言われているのも、具体的には「新約聖書」の思想を指すものと思われる。「新約聖書」に説かれる愛は、英訳の *love* にせよ、漢訳の「愛」にせよ、アガペーの愛である。そして、その「新約聖書」の「愛」は、前述のように特別な形で存在しているものである。繰り返すことになるが、ギリシヤ語原文を正文とする「新約聖書」には愛を表わす語はアガペーしか現れない。すなわち、「新約聖書」における「愛」は、「すべての掟のうちになにを首となすや」という学者の問いに対してイエスの答えた、

なんぢら心をつくし、精神をつくし、智慧をつくし、力をつくして汝らの神たる主を愛すべし。これこそ掟の首なれ。第二もまたこれにおなじく、すなわち隣の人をおのれの如く愛すべし。これらよりほかにおほひなる掟なし。

(マルコによる福音書・第十二章三〇、三一節。ヘボン訳)

という二つの「愛」と「神の人間に対する愛」の三つの意味であった。しかし、ヘブライ語原文を正文とする「旧約聖書」における愛はそうではない。松田伊作氏はヘブライ語のアハヴァーの意義素を「相手を望ましいものと認め、こ

れを精神的にも肉体的にも結合することを強く欲する」こととし、「本来人間関係でとくに男女間の場面に現れる動詞」であると言われていたが、ヘブライ語原典から訳された「旧約聖書」の訳における愛は、そのようなヘブライ語の世界を反映したものである。したがって、「雅歌」もまた男女の愛を謳うものであり、【元訳】の「愛」もエロスの愛を意味するものであった。「旧約聖書」中の新約聖書とも言われる「箴言」の中にも、

婦かれを拉へ接吻し、恥ることなき面をもて彼にいひけるは、(中略) 来れ、我儕をして詰朝まで愛をみたしめ、愛をもて慰ましめよ。(7・13・18)

そは酒に酔ふものと肉を嗜む者は貧者となり、睡を愛すれば敝れたる衣をさるべければなり。(23・21)

といった例も見える。右の訳は明治十六年刊のヘボンの訳であるが、これら「愛をみたす」「睡を愛す」は、後世の訳にはそれぞれ「情をつくす」「睡眠を貪ほる」と訳されているものである。

ところで、同じく「箴言」には、

そはエホバはそのわが愛する者をいましむ。即ち父のその愛する子を謹るが如し。(3・12)

われをわが愛する者は我これを愛し、我を尋るものは我に遇ん。(8・17)

といった例も見られるが、おそらくヘブライの人々にとつては、松田氏が言われるように、「愛」が「神と人との場面に出るのは類推に基づく二次的用法である」のではないかと思われる。【元訳】の「旧約聖書」の翻訳者たちにとつてもまた同じ判断であったであろう。ヘボンと山本秀煌の編纂になる『聖書辞典』(基督教書会社、明治二十五年刊)の「愛」の次のような説明もまた、同様に「愛」を人間の純粹な本能と捉えている。

是天然に人にそなはる情の一にして其目的とするところのものを樂みよるごび之を助け益せんとてはたらくものあり。心を尽し精神をつくし意をつくして主なる神を愛し、又己の如く人を愛するはキリスト教徒の本分なり。神はキリストによりて其すぐれたる愛を世人にあらはし給へり。(下略)

このように「愛」を捉えたことで、男女の世俗的な愛を歌う「雅歌」もまた、神の愛へと導く書となりえると「旧約聖書」の【元訳】の翻訳者たちは考えていたのではなからうか。そしてまた、キリスト教徒ではない日本人には、こうした考え方は説明は受け入れやすいものではなかったかと思われる。

有島武郎の『惜しみなく愛は奪ふ』(大正九年刊)に次のような一節がある(愛の語をゴチックにする)。

人間は人間だ。野獣ではない。天使でもない。人間には人間が大自然から分与された本能がある。(中略) 愛は人間に現れた純粹な本能の働きである。(中略) ポーロはその書翰の中に愛は「惜しみなく与へ」云々といった、それは愛の外面的表現を遺憾なくひ現した言葉だ。(中略) さう思われることを私は一概に排斥するものではない。(中略) 私の経験が私に告げる所によれば、愛は与へる本能である代りに奪ふ本能であり、放射するエネルギーである代りに吸引するエネルギーである。(中略) 小鳥のしば鳴きに、私は小鳥と共に喜び或は悲む。その時喜びなり悲しみなりは小鳥のものであると共に、私にとつては私自身のものだ。私が小鳥を愛すれば愛するほど、小鳥はより多く私そのものである。わたしにとつては小鳥はもう私以外の存在ではない。小鳥ではない、小鳥は私だ。私が小鳥を活き活きするのだ。(中略) 愛は個性の飽満と自由とを成就することにのみ全力を尽しているのだ。(一六、一七)

有島の言う「愛」は「人間に現れた純粹な本能の働き」であり、その本質は自己本位の愛であり、愛欲と言った方が適當なものである。したがって、パウロの言う「惜しみなく与へ」る自己否定の愛、すなわち「新約聖書」の愛はその外面的表現ではない。聖書を読んでいた当時の日本人の教養人もまた、パウロの「愛」をこのように理解していたのではないかと思われる。

注① 植田重雄「雅歌」雑考(『早稲田商学』一五〇号1961)によると「ユダヤ暦によると一年の祭儀に五大祭があり、この書は箴言や伝道の書よりも重要な地位を占めており、「過越しの祭」には「われはなんぢのもの、なんぢはわがものなり」(六ノ三)という箇所が朗読されるそうである。植田氏は「むろんこれは神ヤハヴェにたいする信仰の言葉」として朗読されているのであり、したがって「この朗読は宗教上の比喩的解釈が前提となつていゝ」と言われる。

注② 以上のことは植田論文(注①)の他に、『矢内原忠雄未発表聖書講義 伝道之書・雅歌』(新地書房、1987) ロバート・W・ジョンソン著水野隆一訳「現代聖書注解 雅歌」(日本キリスト教団出版局、2008)、池田裕「旧約聖書の世界」(岩波現代文庫、2001)、G・ロイド・カー著、島先克臣訳「雅歌」(ティンデル聖書注解)いのちのことば社、2006)などを参考にした。

注③ 「雅歌」は「ヨブ記」「箴言」「伝道の書」とともに「旧約聖書」の「知恵文学」と呼ばれるものの一つであるが、「知恵文学」とは「日常の生活の中に神の働きを認め」、「この世界そのものが神の言葉を語りかけている」ことに

気づかせるものであるとされる。関根正雄「聖書の言語と構造」(『旧約聖書学と共に』山本書店、1977 pp.50-51)。

注④ 例えば笹尾鉄三郎口述『雅歌講義』(小兵士団、1924)の冒頭に「注意」として、「此雅歌は特別に主を慕ふ心を以て読まなければ、却て害になるとも何の益もない。唯字義の解釈に拘泥し、文学的に研究するものならば、小説などを読むと異なつた処がない。何卒深き祈禱の中に凡の物より目を離し、主イエスのみに目を注いで此貴い書を研究し玩味したい。」とある。

注⑤ 新村出「御大切といふ言葉」「愛といふ言葉」(共に『琅玕記』収録)など。『岩波古語辞典 補訂版』の「愛」の項には、日本語の「愛」は「儒教的には親子の情などのように相手をいたわり、生かそうとする心持を言い、仏教的には自分を中心にして相手への自分の執着を貫こうとする心持をいう。仏教では「愛」を必ずしもよいとは見ていない。また、概して優位にあるものが弱小のものをいとおしみ、もてあそぶ意の使い方が多かった」とある。

注⑥ 『旧約聖書ヘブライ語アラム語辞典』(“A Concise Hebrew and Aramic Lexicon of the Old Testament” by William L. Holladay, William B. Eerdmans Publishing Company, 1988) には、^{אָהַב} アハヴァーには、
 1. accusative, person : father / son, man / wife, wife / husb.
 2. accusative, thing : justice, bribe.
 3. love God, his salvation.
 4. God loves his faithful.
 5. love to + vb
 6. freind.
 7. misc. : cogn.
 とあり、^{אָהַב} デイヤーには、

1. beloved, lover (son of father's brother asual husband)
 2. a) father's brother, b) sons of father's brother
 3. love (-making)
 とある。名尾耕作・高橋慶編『旧約聖書ヘブル語大辞典 付・アラム語』(改訂3版 教文館、2003)でも同じ。

注⑦ ミルトス・ヘブライ文化研究所編『ヘブライ語聖書対訳シリーズ38』(株式会社ミルトス、1990)を用いた。

注⑧ 松田伊作「旧約ヘブライ語の対人精神活動動詞の意味」(九州大学文学部紀要『文学研究』70号1973.3)

注⑨ 関根正雄「ヘブライ語と日本語のズレ」(『旧約聖書学と共に 下』山本書店、1977, p.55)

注⑩ ただし、英語のloveもまたアガペーの愛とエロスの愛の両方を意味する。例えば研究社『新英和大辞典』(1968版による)のloveの意味を次のように列記している。

- 1 愛、愛情 (affection, tenderness, attachment)
 - 2 好き、好み、愛好 (strong liking, fondness) 好意 (good will)
 - 3 (神の)愛、慈悲 (mercifulness) : (人の神に対する) 対神愛 (veneration)
 - 4 恋、恋愛、恋慕 (sexual affection) pl. 情事 (love affection)
 - 5 色情、性欲 (amorous desire)
 - 6 愛するもの、いとしいもの (darling) : 恋人 (sweet heart)
 - 7 [「」] 恋の神、愛の神、キューピット (Cupid, Eros)
- したがって、「元訳」が直接的には英訳聖書から訳されたとしても同様に言うことが出来る。

注⑪ 池田裕『旧約聖書の世界』(岩波現代文庫2001, p.307)

注⑫ ヘボン『和英語林集成 第三版』には「寵愛」をイツクシミ (isukushimi) と訳し、同義・類義語としてカワイイガル、アイスルを挙げている。

注⑬ 「はじめに」で紹介した高村光太郎の文章について佐波亘は「詩人高村光太郎植村正久の訳した雅歌の訳文について、次のように記している」と記している(『植村正久と其の時代 新補遺』(教文社、昭和五十一年刊P.177)。高村光太郎が引用している「雅歌」の訳文は『旧約全書』所載のものと同じである。これによると植村正久も訳に関わっていたようである。

聖書の翻訳では抽象語を主語とする文は多い。例えば明治十二年刊N・プ
 ラウン訳『志無也久世無志与』のマタイ伝第六章三十四節に「あすがあ
 すの心を おもふべし」【AV】the morrow shall take thought for
 the things of itself、明治十六年刊ヘボン訳「箴言」の第十四章十節に「心
 はおのれの愁を」【AV】The heart knoweth his own bitterness) など
 どれ見られるが、一般に用いられるようになるのは時代が降り、

容易に打ち壊されない自信が、其叫び声とともにむくく首を擡げて来る
 のではありませんか。(夏目漱石の「私の個人主義」大正三年 [1914])
 死は知らんふりをしてそれを見やっている。

(有島武郎『生れ出る悩み』大正七年〔1918〕)

などが早い例のようである。したがって、「愛のおのづから起るときまでは」の主語は愛人と理解されていたのではないかと推測される。湯浅吉郎(半月)の『雅歌』(大正十三年刊)に「ああ恋人よ左手をば私の頭の下におき、右手をのばして抱しめよ。ああエルサレムの女子達、野の鹿さして誓ひ請ふ、愛のおのづから起るまで喚起すなよ醒すなよ」(一章四節)とあるのは、「起る」とあるものの、「始て遇ふてもるとともに、愛のおのづから、起りしは、こゝの林檎の木陰ぞよ」(五章二節)という訳もあり、【元訳】の意図を正しく理解しているものと思われるが、笹尾鉄三郎口述『雅歌講義』(小兵士団、大正十三年刊)に、

この節は六かしき節で種々の解釈がある。或人は之をキリストの言なりといひ、或人は新婦の言とする。(中略)今先ずキリストの言として解釈しやう。／新婦が斯くの如く主の御手に抱かれて、其御懷に安んじて居る時、外よりエルサレムの女子即ち普通の信者が妨害に来る。其時にキリストは此言を以て弁護し給ふ所である。(中略)／次に此節を新婦の言として見んに、キリストと一緒に安んじ居る時に外部より各様の妨害が来り、見ゆる所不信仰人の声等が此楽しき安息を破らんとする(詩百卅二〇三十四)。即ちキリストが我衷に憩ひ安眠して居給ふのに之を妨げんとする。(下略)

とあるのは、なお人を主語としている。

注⑮ 【AV】 my soul loveth, my loves, my beloved, thy love, thy beloved, another beloved, her beloved など所有格が書かれているものは、【元訳】ではそれらを省略せず「我が」「汝の」「別の人の」「おのれの」と訳するのが原則である。しかし、この例においてはそれが省略されている。

注⑯ 研究社『新英和大辞典』の please の項。引用の前に★が付せられているが、「凡例」に「文法・慣用その他の点で必要と思われる補足的な注意・説明・参考事項の記載は、特に★のしるしをその前に置いて検索を容易にした」とある。i. please の説明も同辞典によるが、同じく★が付せられている。

注⑰ 『ヘブライ語聖書対訳シリーズ38』の口語訳も「最もはげしい炎」と訳し、新共同訳も「火花を散らして燃える炎」と訳す。

注⑱ 宮地敦子『身心語彙の史的研究』(明治書院、昭和五十四年刊)第二部第一章「漢文・欧文との交渉―「愛す」の系譜―」。

注⑲ 大野透「「愛」「愛す」に就いて」(『国語学』126、昭和五十六年九月発行)

注⑲ 同。

注⑳ 大野氏の論(注⑱)の「まとめ」は次のとおりである。

(1) 「愛(す)」は、古くは特に上位↓下位の傾向が著しかったが、下位↑上位の例も無視できない。

(2) 「愛(す)」には、漢語「愛」に比する非通俗的なものと、日本語独特の通俗的なものとがある。

(3) 通俗的な「愛(す)」(専ら行動、殊に肉体的表現に関係)は院政初期に生じて、江戸末期に亡びた。

(4) 現代の「愛(す)」は非通俗的な「愛(す)」の流れに沿うものであるが、対等の人間として相手を思ひ、遇する意に用いられる傾向が著しくなっているのは、西洋の影響が認められる。

なお日本語の「愛」については松下貞三著『漢語「愛」とその複合語・思想からみた国語史』(あぼろん社1983)があり、特に大野氏の(3)については別の見方が出されている。

注㉑

宮地氏は明治十三年刊『新約全書』の例を初出例としているが、日本語訳の聖書にこの意味の「愛」が最初に現われるのは、管見では香港で出版されたベッテルハイムの漢和対訳『路加伝福音書』(乙卯年〔1895〕年成)に、

○吾語汝、敵爾者、愛之、憾爾者、善視之。

ワレ ナンヂラ キクモノニカタラン、ナンヂラニ テキスルモノハ

コレヲ愛シ、ナンヂラヲ ニクムモノハ コレニ善ヲホドコセヨ、

(6・27)

と用いられているものが早い。日本国内で訳されたものでも、ゴープル訳『摩太福音書』(明治四年刊)に、

○イエスウ カレに のたまふた あなたは こゝろを つくし たまし

いをつくし おもいを つくし 神は あなたの 公を あい すべ

(12・30)

○かつ にはんは それに ひとし あなたは おのれの やうに きん

(12・33)

と見え、ヘボン『馬可伝福音書』(明治五年刊)に、

○なんぢ心をつくし精神をつくし智慧をつくし力をつくして汝の神たる主を愛すべし。これこそ掟の首なれ。第二もまたこれにおなじく、すな

はち隣の人をおのれの如く愛すべし。これらよりほかにおほひなる掟はなし。

(12・30～31)

○またこゝろをつくし智慧をつくし精神をつくしちからをつくしてこれを愛し隣の人をおのれのごとく愛するはすべての燔犠と供物より勝れり (12・33)

などと見え、同じくヘボンの明治五年刊の『馬太伝福音書』にも「汝の神なる主を愛すべし」(22・37)「わが身のごとく汝の隣を愛すべし」(22・39)と見える。

